

うたらば

短歌×写真のフリーペーパー「うたらば」
2025.11 vol.40

TAKE FREE

休日

今回のテーマ



短歌とは

5・7・5・7・7の5句31音のリズムで詠まれる短い抒情詩。
俳句で使われる「季語」は不要。

古くは奈良時代から身分の貴賤を問わず親しまれ、
現代でも日々の想いを綴る詩形として幅広い層に詠まれています。

一方で、その長い歴史を国語の授業で習うこともあり、
短歌とは難しいものである、と思っている人もしばしば。
このフリーペーパーは「短歌をよく知らない人」に
現代短歌の面白さに触れていただくために作ったもの。
軽い気持ちで、ぜひページをめくってみてください。

作品テーマ

休日



どこまでも自由な
その一日は
あなたにとって
どんな日ですか

プルタブに指をかければ

休日をはじめるための号砲が鳴る

よーいどんって
はじまった
休日すべてが
わたしのものだ

短歌：くらたか湖春

買ってきた餃子もきみが
パーティーと呼ぶから日々
に降る紙吹雪

一緒に食べて
たくさん笑って
そんな時間が
幸せだった

結果がすべて
だとしたら
今日のこの日も
良い日でしたね

「再来週リベンジしよう」と

定休日だったおかげでできた約束

6
June
2028

雨張って登って
頂上から見る景色が
美しいことを
知っているんだ

月 Monday

1 先勝

火 Tuesday

2 先負

水 Wednesday

3 先負

木 Thursday

4 仏滅

たのしみはとっておく派として生きる
手帳を月曜はじまりにして



土曜日のひろい余白よ

素麺に檸檬をかるく絞ってみたり

予定を入れない
その空白に
小さな幸せは
ゆっくり貯まる

短歌：牧角うら

佳作集



休日①

休みってどうしたらいい？漠然とモノ展のちのココカラファイン／石川真琴

いちにちが終わるころには恋人に近づいているはずだった海／玖嶋さくら

ズル休みして飛び乗った快速はネコバスのような風を切り裂く／桐谷やまと

休日が合わないふたり休日が合わないねって笑い合う日々／榊枯井戸

まだ少し風は冷たい休日の川沿いファールフライが上がる／中村マコト

愛犬の曜日感覚鋭くて教えてもらう明日の日曜／リキザリュウ

月曜に有休をとり日曜に行ったライブの余韻に浸る／たろりずむ

海面を目指すみたいに醒めてゆく途中で気づく土曜日がある／西鎮

今日こそはなにもしないと決意してなにもしないをしてる日曜／静句かも

やりたいと思ってたこと片付ける夢を見てから夕方起きた／須藤純貴

休日にサウナ楽しむその裏でスマホも静かに整っている／麻数

生存に余裕があれば鰯にもあったかもしれない休日／佐々木敦史

合わないのは休日だけじゃなかったと悟った結婚二年目の秋／泰源

四度寝も許してくれる懐のかいばあちゃんみたいな土曜／遊鳥泰隆

少しでも運命線が伸びたから君を探した週末のイオン／うおざび

雨になるゆめ ゆめになる夜 夜になり始めている金曜の道／十条坂

食卓の急須の口を真似てみる雨に閉じ込められた休日／持田圭

寝溜めにも体力がいると思ひ知る三十二歳の土曜六時に／冬美

楽しみを詰め込みすぎて休日のtopoリストが増えてく□／山宮のこ

人に会いたくて出てきた休日の駅で乗馬の勧誘を聞く／真島朱火



好きなだけくるくるさせておく癖毛

会えない雨の日曜だから

くるくるくと
癖毛と話す
何にもやる気の
起きない週末

ぎっしり詰まった
脳みそに
働くなよって
呼びかけてみる



頭からっぽにするのつてむずかしい

頭ってそもそもからっぽだっけ？

休日は何してますか？

さみしさをなるべく見ないようにしてます

寂しさとの
付き合い方が
まだ上手くない
一人暮らしの

短歌：吉野圭



ボタンひとつで
機内モードに
切り替えられたら
簡単なのに

Wi-Fiの電波みたいに私にも

つながりにくいときがあります

何もしてない
わけじゃなくて
ただ贅沢を
味わっていた

瓶のなか傾いていく蜂蜜を

見ているだけで終わる休日



羽の生えた靴で
飛び出すように
跳ね回ろうよ
晴れの休日

休日に履きたい靴を手に入れて

私は雲に少し近づく

佳作集



休日 ②

休日の町は見えない虹が覆い居場所は自分の部屋にしかない／君村類

幅広い川をようやく泳ぎきり息つく岸のような土と日／小緑悠

裸眼にきみの影はぼやけて土曜日は乳液をいつもより多く塗る／中山史花

冷蔵庫に土曜の夜がまだあった6Pチーズの最後の1個／佳丸

ゴールデンウィーク・お盆・正月のかわりに 水・土・日 休みたい／椎名 夏

休日はコアラ時間で生きてみるなりきってみる うん、悪くない／友常甘酢

端として休日側の圧勝だ、もしカレンダーがリバーシなら／片夜

日曜のスペアのような土曜日をスペシャルにするフレンチトースト／中村 杏

友達の人スタを見て昨日から連休と知る無職のゆがみ／山本コヤ

ガソリンを入れるついでのコンビニでするあてのない花火を買った／宇祖田都子

来週をつむぐことばを借りに行く土曜の朝の小さき図書館／古澤茅世加

日曜の過ぎゆく速度 子が両手伸ばしたままで駆けるのを追う／歌弁

働いた夜は声しか聴けなくて熱を伝えるための休日／麻倉ゆえ

10年も経てば時間の価値が違ふ知ってるこれは老化ってやつだ／レスト

休日でも早起きをする愛犬と休日用の公園に行く／葉月ままこ

育休の手に応じ五割だけ育児に励み妻が冷たい／貴田雄介

母の焼くホットケーキの香りして目覚めればただひとり東京／森口花南

有給を取得してから考える世界救うか昼まで寝るか／稲井亮太

休日の名もない旅に癒されて帰るわたしを拗ねて待つ家／衣未（みみ）

メガネとか髪の毛の分け目が逆だとか知らない君を知れた日曜／原田 冬



読む。

「月刊うたらば」より

文・田中ましろ

ネコバスも蚊帳もまつくろくろすけも今やあっちの夏にしかなく

(村川愉季)

「あっちの夏」という表現に惹かれた作品。「あっち」というだけで距離を感じますが、それはただ物理的な遠さではなく、時間や心理面での距離まで包含しているように思えます。『となりのトトロ』は昭和63年公開の映画で、舞台は昭和30年代。令和の今から見れば70年前。「あっち」と呼ぶのが相応しくくろいに時が過ぎたのだと胸に響きました。

金銀をもらえないのはいいとしてせめて落とした鉄は返せよ

(たろりずむ)

木こりが泉に斧を落とすと現れる女神。誰もが子供の頃に見聞きした寓話を下敷きにした作品が欲張りな木こり目線で語られています。お話としては「嘘をついてはいけない」を教訓にするために重要な流れですが、冷静に考えると女神は欲張り木こりの斧を窃盗したわけで。下の句の主張が正論すぎて笑ってしまいました。面白い短歌は強い。



失った笑顔いくつも散らばってカメラロールのやさしい仕打ち

(玖嶋さくら)

結句の「やさしい仕打ち」から主体が「失った笑顔」たちに対して負の感情を持っていないことがわかり、これは単なる失恋の歌ではなく、やむなく離別した誰かとの思い出の歌なんだろうと読みました。写真は過去を保存するもの。悲しみも呼び覚ましてしまうカメラロールですが、その笑顔を忘れないために重要な役割を果たしているのだと思います。

帰るとき「帰る」と送るラブレターなんかじゃないけど一番近い

(みぎひと)

帰宅前に送る「帰る」の送り先はおそらく妻だと読みました。たった2文字の連絡ですが、それがあるかないかで家事の効率は大きく違うようで、ぶつかりばうな文面の中に妻への気遣いが見え隠れします。そしてそのことを薄々感じている主体。照れ隠しのような3句目以降にとっても好感を持ちました。不器用な男、良きです。先日サイトのリニューアル時にこっそり表紙フォントに追加しました。

その闇は絶望じゃなく暗転でさみの舞台は二幕に移る

(関根裕治)

テーマ「暗」をポジティブに変換した見事な一首。「止まない雨はない」や「出口のないトンネルはない」に通じる表現ですが、下の句の「さみの舞台は二幕に移る」がただ暗闇から抜けただけでなく、勢いを持って次のステージへ飛び出す印象を与えているところに慣用句を超えた表現の強さを感じました。覚えておけばいつかお守りになりそう。

巡回のバスは減らされ祖母のいる村が静かに失くす輪郭

(ナカムラロポ)

下の句は比喩ですが、その比喩から得られる感覚的確さが素晴らしいと思いました。定期的に行っているバスは過疎化の進む村にとっては重要なライフラインで、そのバスがあるがゆえに人の往来が生まれ、まるで血管のように村の生活を形作っている。バスの頻度が減ることはその生活が形を失うこと。外部とのつながりが希薄になり限界集落となりゆく村を思うと切なさ胸に突き刺さります。

当たり前がそうじゃなくなる日のことをやっぱりいつも忘れてしまう

(奥 かすみ)

事件や災害が起きると日常が簡単に壊れることを突きつけられて、防犯や防災の意識は高まるものの、平穩に戻るとどうしてもまた意識が薄れる。身近な人が病気に罹るなどの変化も同様に。結句の「忘れてしまう」から想像するに作中主体にどうして何か忘れたくないものがあるのでしょうか。具体を出さないことで共感性が高まっているように感じた作品です。

公園のパンダの遊具の背は剥げて一方的な愛はつらいね

(ふうらい牡丹)

ギイギイと音を立てて子供たちに全力で漕がれた結果、遊具の背中が衣服との摩擦で剥けてしまっているという景。それを受ける下の句「一方的な愛はつらいね」が秀逸です。確かにあれって一方的なんですよ。動物なら撫でられまると途中で嫌がって逃げもできますがそれでもできない。子供たちの愛を背中受けて止めてポロポロになっていく姿に哀愁を感じました。



粉々になったお皿に愛着があったと思うために怒った

(田村陽)

人の行動原理について考えさせられる作品。個人的に気に入っているお皿があったとして、そのお皿に入りレベルがどの程度なのかは常に相対的に決まるもの。絶対的な尺度がなく「どちらかといえば好き」な状態のものを失ったときに表出する感情があたかも自分がそれを「絶対的に好き」だったかのような振る舞いになる。失わないと気付けな、とはまさにこういうことなのだと思います。

糸くずにさわると恋になりそうで世間話は駅まで続く

(吉村のぞみ)

一緒に帰っている異性の服に見つけた糸くず。取るには相手に触れる必要があり、触れたら自分の恋心に気付いてしまいう気がする。いや、そう思っている時点で恋ですよ、とも思いましたが、結局糸くずには触れずに駅まで世間話をした下の句を見る限り、恋してはいけない関係なんだろうな、という読みに至りました。相手の感情は描かれていませんが、相手から恋愛対象と思われることはないと主体は気付いているように感じます。

短歌募集中

「月刊うたらば」では、いつでも作品を募集しています。毎月変わる投稿テーマにて、短歌作品をぜひお寄せください。今月のテーマは「うたらば」の公式サイトをチェック↓



大きな声は
空へと溶けて
秋の午前の
おだやかなこと

生きていることを笑おう

秋空の高さまで声を飛ばせ祝日

短歌：田中ましろ

編集後記

区切りの良い 40 冊目のうたらば、最後までご覧いただきありがとうございました！「休日」というテーマははっきりハッピーな歌がたくさん届くと予測したのですが蓋を開けると暇を持て余して孤独と向き合う人の多さに驚いた回となりました。結果的にネガ・ポジを半々くらいに盛り込んだ仕上がりとなりましたが、「休日」の捉え方も人それぞれなのが面白いところですね。

今回の制作ではあまり天候に恵まれず何度か撮影延期もしましたが、笑顔で対応してくれたモデルの TOKO さんにも感謝を。

公式サイトをリニューアルして記事コンテンツが始まるなど、ちょっとだけパワーアップした「うたらば」を今後ともよろしくお願いいたします～！

企画・写真・詩・デザイン
田中ましろ

うたらば vol.40 【休日】 2025 年 11 月 15 日発行

○企画・撮影・編集 / 田中ましろ ✕ @tnkmsr_photo

○モデル / TOKO @iamtookoo

○短歌 / 投稿者の皆様

✕ @utalover 地球儀 <https://www.utalover.com/>

短歌は
もっと
自由になれる

